

社会人のフィジカル・レクリエーションに関する研究

—名古屋市内公立高等学校の卒業生の場合—

(昭和50年2月1日受付)

名古屋大学助教授 中 島 豊 雄
名古屋学院大学助教授 坪 田 暢 允

I 研究の目的

わが国における体育・スポーツは学校を中心に発達し、社会人としての生活を通しての体育・スポーツは立ち遅れているといわれる。このことは、換言すれば、学校教育の場においては体育・スポーツ活動に参加するが、卒業後社会人としての生活の場ではフィジカル・レクリエーションに参加しない傾向が強いということの意味しているともいえる。

しかし、近年国民の体育・スポーツに対する関心が高まるとともに、生活のなかにおけるフィジカル・レクリエーションへの要求が急速に高まってきている。このことは、学校の体育・スポーツ教育が、在学期ばかりでなく、生涯にわたってのフィジカル・レクリエーションの配慮のうえに意図されなければならないことを強調するものであり、さらに学校の体育・スポーツ教育を卒業後のフィジカル・レクリエーションの観点から再吟味してみる必要性のあることを意味するものであろう。

学校の教育が、人間の意識や行動に及ぼす影響は非常に大きく、学問や芸術に対してはもちろんのこと、趣味や娯楽活動に対しても、人々

に興味を抱かせたり、技術を習得させたりする場合の鍵であり、基本的なものであることはいうまでもない。そして、体育やスポーツ活動についても、学校教育の影響は、他の場合と同様域外ではないであろう。したがって今日、社会生活のなかにおけるフィジカル・レクリエーションの普及・振興を考える場合、まず学校時代に受けた体育・スポーツに関する教育が、その後の生活のなかでどのように受け入れられ、また、それに対してどのような考えをもっているかなど、学校における体育・スポーツと卒業後におけるフィジカル・レクリエーションの間に存在する関係を究明し、さらに学校の体育・スポーツ教育が現実のフィジカル・レクリエーションを規定しているさまざまな要因のなかで、どの側面に関連があり、またそれが卒業後のフィジカル・レクリエーションを規定する基本的な鍵であり得るのか、あり得ないのかなどを追求することが重要な課題となってくる。

しかし、今日までこれらの問題については、わずかに概念的に論ぜられているにすぎず、まとまった組織的研究はきわめて少ない^{※1}。そこで筆者は、この問題を体系的に把握しようと試みて、研究の第1歩として「学校体育と社会体育

※1 最近では

(1) 嘉戸 修：1974 運動クラブの運動欲求変容機能に関する一考察、体育とスポーツ集団の社会学（道と書院）

(2) 坪田 暢允：1974 社会体育に関する高等学校教師の態度（名古屋学院大学論集11-1）

(3) 中島 豊雄：1971 学校体育と社会体育の接点に関する研究（名古屋大学紀要15）

の接点に関する研究^{※1-3}において、大学卒業者のフィジカル・レクリエーションと大学の体育・スポーツとの関連の問題を究明し、学校教育の場における体育・スポーツと卒業後社会人としての生活の場におけるフィジカル・レクリエーションとの間に存在する関連条件について、いくつかの知見を得た。しかし、資料が大学卒業者に限定されたものであるため、この問題をさらに究明していくためには、数多くの研究調査の集積が必要である。そこで、今回は上記の研究成果をふまえて、学校教育における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係に関する研究をさらに発展させるために、高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係を究明した。したがって、本論文は、高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係に限定された範囲についての究明の報告である。

Ⅱ 研究の方法

1 方法 郵送法による質問紙法

2 時期 昭和47年3月

3 対象

対象者は、昭和35年3月、昭和40年3月の名古屋市内公立高等学校の男子卒業生で調査に回答した779名である。調査票の配布数および回収の状況はつぎのとおり

調査票の配布総数 : 1850
 調査不能数 : 351
 回収有効調査票数 : 779
 回収率 : 54.2%

なお、対象者の選定は、公立高等学校8校の卒業生を、同窓会名簿によって無作為抽出した。

4 対象者の特性

表1に示すごとく、年齢は昭和35年3月卒

業者(390名)のほぼ全員が30才であり、昭和40年3月卒業生(389名)のほぼ全員が25才である。学歴は高卒者が46.1%、大卒者が53.9%である。結婚は未婚者が51.6%、既婚者が48.4%である(資料-1参照以下^{※2}同じ)。職業は大企業従業員29.3%、中小企業従業員25.4%、公務員20.3%などである(資料-2)。

表1 対象者数と学歴

卒業年次(年齢)	実数	学歴	
		高卒	大卒
昭和35(30才)	390	198 (50.8)	192 (49.3)
昭和40(25才)	389	160 (41.1)	229 (58.9)
計	779	358 (46.0)	421 (54.0)

5 分析の方法

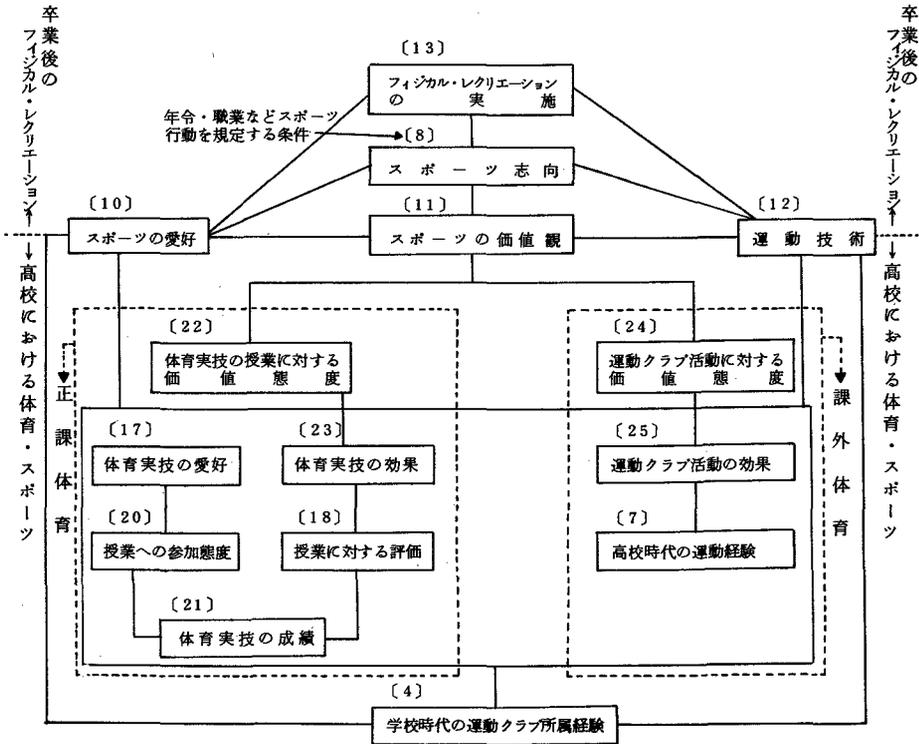
第1図に示す説明モデルにもとづいて、各項目間の相互関連を分析し、高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係の究明に重点をおいて考察する。なお、項目間の有意差検定は X^2 検定をもちい、さらに危険率5%以下で有意な関連にあるものについては、関連の強弱をクラマーの関連係数で求めた。ただし、クラマーの係数はその平方根で示した。

なお紙数の関係で、項目間の関連表は大部分割愛せざるを得なかったため、おもな関連表のみを必要最少限のせた。

Ⅲ 調査結果と考察

上記第1図に示した説明モデルにもとづいて調査結果を整理し、下記の3領域について、それぞれ「反応内容」「項目間の関連」「まとめ

※2 資料は文末にのせてある。



(注) 図中の数字は、資料の項目ナンバーを示す

図 1 説明のモデル

の項に分類して考察した。

- 1 卒業後のフィジカル・レクリエーション
- 2 高校における体育・スポーツ
- 3 高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係

1 卒業後のフィジカル・レクリエーション

卒業後のフィジカル・レクリエーションを、フィジカル・レクリエーションの実施、スポーツ志向、スポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術の4側面からみることにする。

〔反応内容〕

フィジカル・レクリエーションの実施程度は、週1回以上やっているものが34.0%となっており、比較的高い(資料13)。スポーツに対

する意欲も強いといえる(資料8,14)。また、フィジカル・レクリエーションの実施程度とスポーツに対する意欲は、いずれも年齢による差異はほとんどみられない。

つぎに、スポーツの愛好とスポーツの価値観についてみると、社会生活のなかでのスポーツに対しては、好意的態度を示すものが多い(資料10,11)。また多くのものが自分の運動技術に自信をもっている(資料12)。

〔項目間の関係〕

表2,3,4,5と図2に示すように、フィジカル・レクリエーションの実施はスポーツ志向と強い関連があり、スポーツの愛好、運動技術とも有意な関連がある。スポーツ志向は、スポーツの愛好運動技術、スポーツの価値観と強

い関連があり、さらにスポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術の3者相互の間にも有意な関連がある。

表2 フィジカル・レクリエーションの実施とスポーツ志向との関連

P<0.01		スポーツ志向				
		N	非常にやりたい	機会があればやりたい	たまにはやりたい	やりたくない
フィジカル・レクリエーションの実施 (一年間の実施目標を明らかにした結果)	週3回以上	74	40.5	58.1	1.4	—
	週1~2回程度	144	16.4	81.3	4.2	—
	月1~3回程度	191	11.0	79.6	9.4	—
	年6~11回程度	126	4.0	74.6	21.4	—
	年5回以下	173	3.5	68.8	26.0	1.7
	なし	71	—	62.0	35.2	2.8

(注) 有意差検定はX² 検定(以下同じ)

表3 スポーツ志向とスポーツの愛好との関連

表4 スポーツ志向とスポーツの価値観との関連

表5 スポーツ志向と運動技術との関連

		スポーツの愛好			スポーツの価値観			運動技術					
		スポーツが好き	すきでもない	きらい	積極的にやるべきだ	できるだけよい	やりたいたいの	多く並以上の人が	得意種目あり	得意種目なし	一人種目程度	全く自信がない	
スポーツ志向	非常にやりたい	83	100	—	—	18.1	80.7	1.2	30.1	26.5	41.0	2.4	—
	機会があればやりたい	569	96.0	4.0	—	3.3	88.6	8.1	10.5	24.8	52.4	10.0	2.3
	たまにはやりたい	122	36.9	54.4	5.7	2.5	68.0	29.5	1.6	8.2	50.0	27.0	13.1
	やりたくない	5	—	40.0	60.0	—	60.0	40.0	—	—	20.0	20.0	60.0

P<0.01

P<0.01

P<0.01

〔まとめ〕

フィジカル・レクリエーションの実施はスポーツ志向と強い関連があり、同時にそこでのスポーツ志向はスポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術と強い関連がみられる。このことは、卒業のフィジカル・レクリエーションの実施はスポーツの意欲によって強く支えられており、さらにその意欲はスポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術の3要因によって規定さ

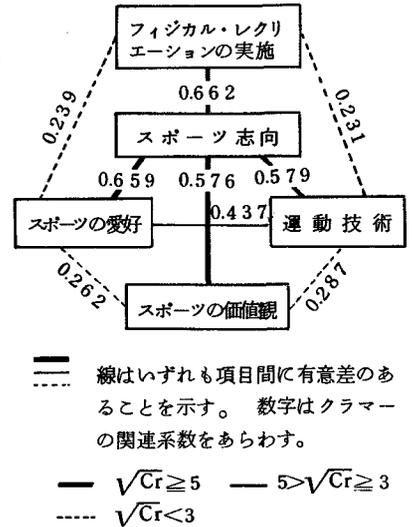
れていることを示すものであるとってよからう。これらの関係をまとめて図示すると図2のようになる。

2 高校における体育・スポーツ

高校における体育・スポーツを正課体育と課外体育とに分けて考察する。

〔反応内容〕

正課体育について、まず体育実技の授業に対



— 線はいずれも項目間に有意差のあることを示す。数字はクラマールの関連係数をあらわす。

— $\sqrt{Cr} \geq 5$ — $5 > \sqrt{Cr} \geq 3$

---- $\sqrt{Cr} < 3$

図2 卒業後のフィジカル・レクリエーションの関連図

する価値態度についてみると、たとえば「体育実技は高校教育の科目のなかでもっとも価値あるものの1つだ」に賛成しているもの54.0%（資料22Q2）、「高校は人間形成をするところであるから、その意味で体育実技はかかすことができないものだ」に賛成しているもの90.1%（資料22Q3）と、体育実技の高校教育における存在価値を肯定しているものが多い。つぎに、体育実技の効果についてみると、「健康の増進と強い体力の養成」、「協調性とよい人間関係」、「気分の転換」には、それぞれ81.3%、80.2%、87.2%のものが「役立っている」と肯定的反応をしているが、「体育の授業でえた運動技術が、今日社会人となったときにも役立っている」とするものは49.5%で約半数が肯定しているにすぎない（資料23）。また授業に対する評価についてみると、高校で受けた体育実技の授業が「とても充実していた」と反応しているものは5%（資料18）ときわめて少なく、また教官の授業のすすめ方に対して「とてもよかった」とするものは6.2%（資料19）にすぎない。それにもかかわらず、授業への参加態度は積極的であり、体育実技の授業にはきわめて好意的である（資料17.20）。

つぎに、課外体育について、まず高校時代の運動経験についてみると、運動部経験者は77.4%（資料4）である。また「スポーツをよくやった方だ」とするものは43.3%、「スポーツをほとんどやらなかった」とするものは13.5%となっている（資料7）。つぎに、運動クラブ活動に対する価値態度についてみると、たとえば「運動クラブ活動は高校生活にかかすことができないものである」に賛成しているもの81%（資料24Q1）、また「運動クラブ活動は高校教育の重要な要素である」に賛成しているもの83.4%（資料24Q2）と、高校における運動クラブ活動の重要性を肯定しているものが多い。つぎに、運動クラブ活動の効果についてみると「気分の転換」をのぞいては、全般的に体育実技の場合よりも効果を認めているものが多い。とくに、「運動クラブ活動でえた運動技術が今日社会人となったときにも役立っている」とするもの68.3%（資料23Q7）と、体育実技の場合よりもかなり高くなっている。

—— 線はいずれも項目間に有意差のあることを示す。 数字はクラマーの関連係数をあらわす。

〔項目間の関係〕

正課体育では、表6・7・8と図3の左半分に示すように、教官に対する評価、授業に対する

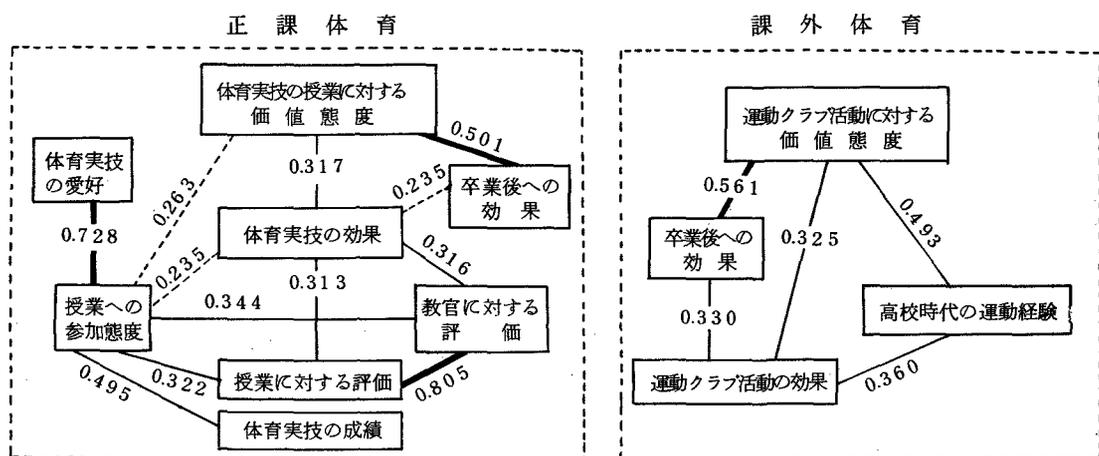


図3 高校における体育・スポーツの関連図

表6 体育実技の効果と授業に対する評価

		授業に対する評価			
		とても 充 実	どう もか と 思 た う	充 実 し て い な い	P<0.01 (N)
体育実技 の 効果	好意的	7.4	74.6	18.0	165
	中間的	2.9	69.7	27.4	208
	非好意的	1.8	52.1	46.1	406

表7 体育実技の効果と教官に対する評価

		教官に対する評価			
		とても よ か っ た	ま あ よ か っ た	よ か っ た と は い え な い	P<0.01 (N)
体育実技 の 効果	好意的	9.1	78.8	12.1	165
	中間的	2.9	76.0	21.2	208
	非好意的	3.0	57.6	39.4	406

X² 検定 (以後同じ)

体育実技の効果および運動クラブ活動の効果については、Q 1, 2, 6, に対して、好意的反応…1点 中間的反応…0点 非好意的反応…-1点を与えて、その合計が 3点…好意的 1~2点…中間的 0~-3点…非好意的とした。

表8 体育実技に対する価値態度と体育実技の効果

表9 運動クラブ活動に対する価値態度と運動クラブの効果

表10 運動クラブ活動に対する価値態度と高校時代の運動経験

		体育実技の効果				運動クラブ活動の効果				高校時代の運動経験			
		好 意 的	中 間 的	非 好 意 的	P< 0.01 (N)	好 意 的	中 間 的	非 好 意 的	P< 0.01 (N)	よ く や っ た	あ る 程 度 た	や ら な ん ど か っ た	P< 0.01 (N)
価値 態度	まったく その通りだ	69.2	19.4	11.4	201	88.1	11.5	1.4	430	58.8	35.8	5.3	430
	そんな 気もする	61.8	22.7	15.5	220	84.4	11.5	4.2	192	28.6	53.1	18.2	192
	どちらとも いえない	43.9	33.7	22.4	260	64.7	25.5	9.8	51	19.6	51.0	29.4	51
	そうは 思わない	33.8	33.1	33.1	98	62.3	17.9	19.8	106	17.9	51.9	30.2	106

表11 運動クラブ活動の効果と高校時代の運動経験

		高校時代の運動経験			
		よ く や っ た	あ る 程 度 た	や ら な ん ど か っ た	P<0.01 (N)
運動 クラブ 活動 効果	好意的	46.3	43.0	10.8	640
	中間的	32.3	49.5	20.2	99
	非好意的	22.5	37.5	40.0	40

る評価、体育実技の効果、授業への参加態度の4者の間には相互に有意な関連がある。また、体育実技の授業に対する価値態度と体育実技の効果—とくに運動技術の卒業後への効果—とは強い関連がある。また、体育実技の愛好と授業への参加態度とは強い関連がある。

課外体育では、表9、10、11と図3の右半分にみるように、運動クラブ活動に対する価値態度、運動クラブ活動の効果、高校時代の運動経験の3者相互の間には、いずれも有意な関連がある。なかでも、運動技術の卒業後への効果

※3 「運動技術の卒業後への効果」は「体育実技でえた運動技術は、社会人になったときにも役立っている」とする項目をさす(資料23-Q7)。

と運動クラブ活動に対する価値態度とは強い関連がある。

〔ま と め〕

正課体育についてみれば、教官の授業のすすめ方や授業に対する評価は低く、高校における体育実技の効果を認める度合も高くはないが、体育実技の高校における存在価値を積極的に肯定しているものは多い。授業に対する評価、体育実技の効果、授業への参加態度、体育実技の授業に対する価値態度の4者間にはそれぞれ相互に強い関連があるが、このことは、教官や授業に対する評価が高まれば、相互関係にある授業の効果に対する認識が高まり、それがやがて授業への積極的参加をうながし、体育実技愛好への態度や体育実技への価値態度が形成されていくことを示唆しているといえよう。後述するように、このように形成された体育実技愛好への態度と体育実技に対する価値態度は、卒業後のフィジカル・レクリエーションと関係をもってくるのである。

課外体育についてみれば、高校時代にスポーツをよくやったとするものは決して多いとはいえない。運動クラブ活動に対する価値態度と運動クラブ活動の効果および高校時代の運動経験

の3者の間には相互に強い関連がみられるが、このことは高校時代にあっては、運動経験の豊富なものは運動クラブ活動に多くの効果を認める傾向にあり、その効果を認識することが高校における運動クラブ活動の意義をより高く評価していく要因のひとつになっていることを示しているといえよう。後述するように、こうして高校時代に形成された運動クラブ活動に対する価値意識は、スポーツに対する価値観を高め、卒業後のフィジカル・レクリエーションと関係してくるのである。これらの関係をまとめて図示すると図3のようになる。

3 高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係

高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの接点に、スポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術の3要因を仮定し、これらの3要因と卒業後のフィジカル・レクリエーションの間には、すべて強い関連があることは前述したとおりである。したがって、ここではこれら3要因と高校における体育・スポーツとの関係を明らかにする。このことは、また高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関

表 12 スポーツの愛好と体育実技の愛好

表 13 スポーツの愛好と運動クラブ活動の効果

表 14 スポーツの愛好と高校時代の運動経験

		体育実技の愛好					運動クラブ活動の効果				高校時代の運動経験			
		すき	すきな方	きらいな方	きらい	P < 0.01 (N)	好意的	中間的	非好意的	P < 0.01 (N)	よくやった	ある程度やった	やほらなどだった	P < 0.01 (N)
スポーツの愛好	すき	47.0	44.4	8.0	0.6	674	85.2	12.3	2.5	674	49.0	41.2	9.8	674
	すきでもきらいでもない	5.3	54.7	38.9	1.1	95	64.2	14.7	21.1	95	7.4	58.9	33.7	95
	きらい	—	20	50	30	10	50.0	20.0	30.0	10	—	30.0	70.0	10

※ 4 「運動技術の卒業後への効果」は「運動クラブ活動でえた運動技術は社会人になったときにも役立っている」とする項目をさす(資料 2 4 Q 7)。

係を明らかにすることにもなる。

〔項目間の関係〕

スポーツの愛好と高校における体育・スポーツとの関連

正課体育との関係では、表12と図4の左半分に示すように、スポーツの愛好は体育実技の愛好と体育実技の成績と有意な関連にあるが、他の項目とは有意な関連がみられない。一方、課外体育との関係では表13・14・15と図4の右半分に示すように、スポーツの愛好は、高校時

表15 スポーツの愛好と運動クラブ活動に対する価値態度

		スポーツの愛好				P<0.01 (N)
		すき	きらいでもない	きらい		
対運動するクラブ活動に価値態度	Q「まったくその通りだ」	93.0	6.5	0.5	430	
	Q「高き活校のこのは運動あで生ラ」	80.7	18.2	1.0	192	
	Q「どちらともいえない」	76.5	17.6	5.9	106	
	Q「そうは思わない」	75.5	21.7	2.8	51	

代の運動経験、運動クラブ活動の効果、運動クラブ活動に対する価値態度の3要因といずれも有意な関連がある。

スポーツの価値観と高校における体育・スポーツとの関連

スポーツの価値観は、表16・17と図4の中央に示すように、正課体育の体育実技の授業に対する価値態度、課外体育の運動クラブ活動に対する価値態度と有意な関連にある。しかし、他の項目とは全く関連がみられない。

運動技術と高校における体育・スポーツとの関連

運動技術は、表18・19・20と図4に示すように、課外体育とは有意な関連があるが、正課体育とは有意な関連がみられない。すなわち、運動技術と有意な関連にあるものは、高校時代の運動経験、運動クラブ活動の効果、運動クラブ活動に対する価値態度であり、これらはすべて課外体育の範疇に属するものである。

〔まとめ〕

以上のことから、高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションは、

表16 スポーツの価値観と体育実技に対する価値態度

表17 スポーツの価値観と運動クラブ活動に対する価値態度

		体育実技に対する価値態度					運動クラブ活動に対する価値態度				
		Q「体育実技は高校教育科目のなかでもっとも価値あるものの1つだ」					Q「高校の運動クラブ活動は高校生活にかくこのできないものである」				
		まったく通りだ	そんなもする	どちらともいえない	そうは思われない	P<0.01 (N)	まったく通りだ	そんなもする	どちらともいえない	そうは思われない	P<0.01 (N)
スポーツの価値観	積極的にやるべきだ	31.5	27.0	5.4	32.4	37	62.2	27.0	—	10.8	37
	できるだけやった方がよい	26.6	29.6	13.1	30.9	657	58.9	23.7	4.7	12.6	657
	やりたいものがあればよい	15.3	20.0	11.8	52.9	85	34.1	30.6	11.8	23.5	85

スポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術を媒介として結合していることが明らかにされたといえる。その関連の度合は正課体育よりも課外体育においてより強くみとめられる。すなわち、正課体育はスポーツの愛好とスポーツの価値観を媒介として卒業後のフィジカル・レクリエーションと関連しているが運動技術とは関連がない。このことは、正課体育に関しては授業への積極的参加と体育実技愛好への態度形成が、卒業後のスポーツ愛好の程度を高め、さらに卒業後のフィジカル・レクリエーションに關係してくることを示し、また一方体育実技の授業に対する価値態度および体育実技の効果とスポーツの価値観の3者の関係を吟味すると、高校時代の体育実技の効果に対する認識が高まるのが授業に対する価値意識を高め、それがやがてスポーツの価値観に影響を与え、卒業後のフィジカル・レクリエーションにつながっていく可能性を示しているといえる。他方、課外体育はスポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術の3要因を媒介として卒業後のフィジカル・レクリエーションと強く関連し合っている。このことは、課外体育に関しては、運動経験が基盤にあって、それが運動クラブ活動の効果に対する認識や運動クラブ活動に対する価値態度を高め、それが接点としてのスポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術とからみあって、卒業後のフィジカル・レクリエーションを規定しているといえる。さらに、運動経験はダイレクトに運動技術とスポーツの愛好と結びついて卒業後のフィジカル・レクリエーションに影響をおよぼしているのである。以上の関係をまとめると図4のようになる。

IV むすび

すでに筆者は、昭和47年に「学校体育と社会体育の接点に関する研究—大学における体育

およびスポーツ活動と卒業後のスポーツ行動との関係—」の論文で、大学における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係を究明してきたが、本論文ではそれと同様な方法ももちいて、高校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係を資料にもとづいて論じてきたのである。そこで、以下前回の調査結果をも参考にしながら、今回得られたいくつかの知見を整理してみることにする。

(1) 高校卒業者は、高校教育で受けた正課体育の授業内容や教官の授業のすすめ方には満足しているものは少ない。しかし高校教育における体育実技の必要性や意義を積極的に認めている。

(2) しかし、卒業後社会人としての生活のなかでフィジカル・レクリエーションに参加する場合、正課体育でえた運動技術よりも課外体育でえた運動技術の方をより高く評価している。

(3) 今回の調査においても、大学の場合と同様、学校における体育・スポーツと卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関係は、スポーツの愛好、スポーツの価値観、運動技術の3要因をフィルターとして結合していることが明らかであった。

(4) また、3要因のうち、スポーツの愛好とスポーツの価値観の2要因は、正課体育と課外体育の両方と関連しているが、運動技術は課外体育とのみ深く関連している。

(5) 以上のことは、正課体育は体育実技への愛好の態度と体育実技の授業に対する価値態度を媒介として、卒業後のフィジカル・レクリエーションと結合していることを示すものである。また、正課体育と運動技術との間に関連がみられないことは、技術面においては課外体育の影響が強く、体育教育における正課体育の限界を示しているものと考えられる。

(6) 卒業後のフィジカル・レクリエーションとの関連では、高校時代の運動経験が重要な要素となっている。高校時代の運動経験は、運動技術とスポーツの愛好と直接結合し、卒業後のフィジカル・レクリエーションと関係している。

(7) しかし、運動経験そのものは、スポーツの価値観とは直接関連がみられない。このような傾向は大学の場合にもみられた。

(8) したがって、高校における運動経験が卒業後社会人としての生活をするなかでのスポーツの価値観とは結びついていないこと、高校における正課体育がスポーツの価値観と結びついていること、この2つの結果をあわせ考えると、高校における正課体育は単なるスポーツの実践やスポーツの興味、関心あるいは運動技術の追求におわるのではなく、スポーツの価値観を高めるような認識をともなった授業になってこそ、それは卒業後のフィジカル・レクリエーションへのより大きなポテンシャルティになり得ると考える。

なお、紙面の関係で本論文ではふれることができなかつたが、前回の大学卒業者の場合にみられたように、卒業後社会人としての生活のなかで行なわれるフィジカル・レクリエーションは、学校時代に教育の場を通して経験したことのあるスポーツ種目から選択されるよりも、むしろ学校教育のなかでは全く経験したことのない種目から選択されることが多いという結果は、

今回の調査でも実証された。この点についての資料は本論文では割愛せざるを得なかつたが、その傾向は、論文「現在やっているスポーツ種目と学校時代におけるその種目経験との関係」の項一で詳細にのべてあるので参照されたい。

昭和50年2月31日

参 考 文 献

- 1) 竹之下休蔵：1968 学校体育と社会体育の接点、学校体育21-9
- 2) 前川 峯雄：1970 生涯体育論、体育の科学20-9
- 3) Sport and Community: 1961(The-Report of Wolfenden Comittee)
- 4) 文部省：スポーツに関する世論調査
- 5) 嘉戸 修：1974 運動クラブの運動欲求変容機能に関する一考察、体育とスポーツ集団の社会学、道と書院
- 6) 坪田 暢允：1974 社会体育に関する高等学校教師の態度、名古屋学院大学論集11-1
- 7) 中島 豊雄：1971 学校体育と社会体育の接点に関する研究、名古屋大学紀要15
- 8) S.W.Percivol：1967 Physical Education For What? Physical Education, 56-176